

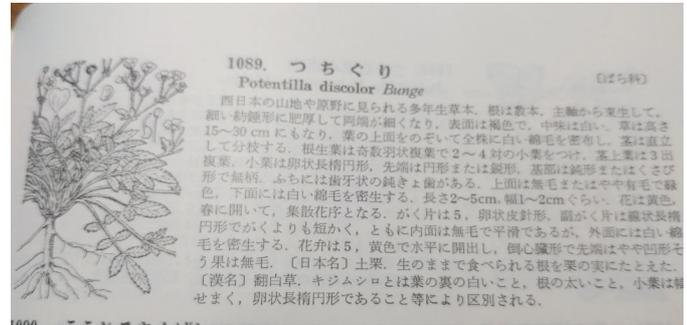
「ツチグリの探究 (2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

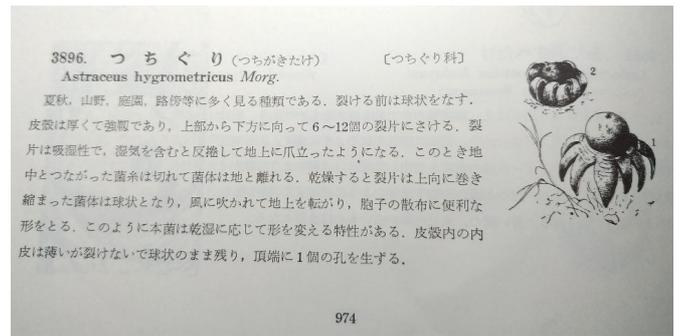
田中 千尋 Chihiro Tanaka

日本産のキノコの中には、「ご当地キノコ」というものも何種類か知られている。たとえば「ドクササコ」というキノコは、北陸地方や佐渡の竹林にだけ見られる変わった種類だ。名の通り毒なのだが、中毒症状も非常に変わっている。食してしばらくは何ともないが、次第に指先などに「焼け火箸で刺されたような」激痛が現れ、それが数日間続くという恐ろしいものだ。一方「ツチグリ」はご当地キノコでも何でもなく、日本各地で普通に見られる。

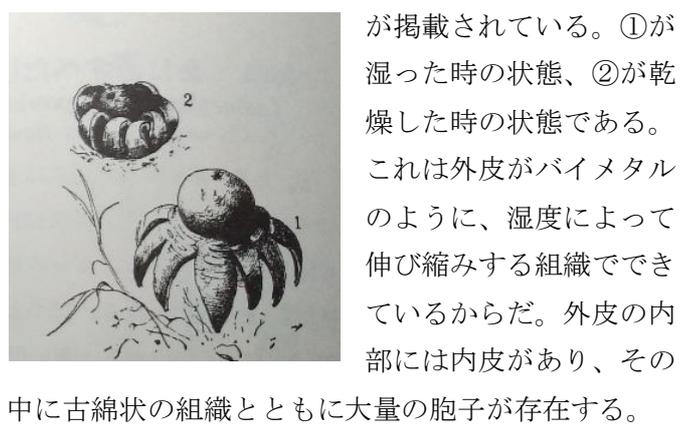


牧野にも「ツチグリ」はちゃんと掲載されている。面白いことに索引で「つちぐり」を牽くと、離れた2つのページが示されている。実は種子植物の「バラ科」にもツチグリという植物が存在するのだ。牧野によれば「根が栗の実に似た味」と説明されている。

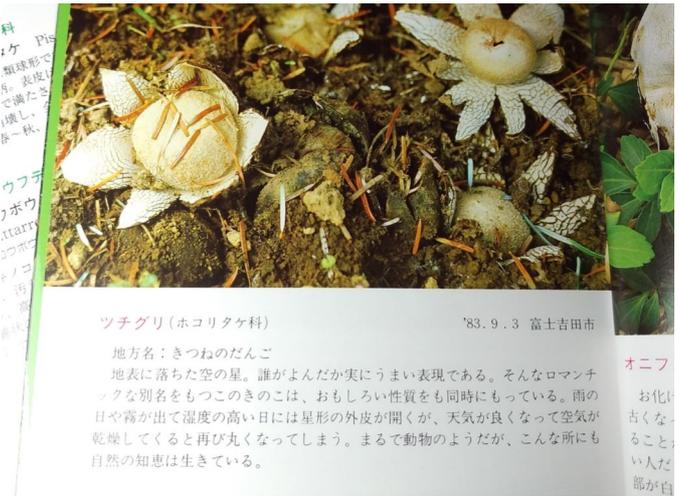
牧野はバイブル的・古典的な日本の植物図鑑で、種子植物、シダ類、コケ類が載っている。しかし当時は菌類も「植物界」に分類されていたので、かなりの数のキノコも掲載されている。ツチグリは実に最終ページの974ページ、3896番目に掲載されていた。



「広島」「山梨」「牧野」、どの図鑑にも共通した説明として「乾湿によって、形を変える」という点がある。3896番には牧野自身の線描画による「ツチグリ」



が掲載されている。①が湿った時の状態、②が乾燥した時の状態である。これは外皮がバイメタルのように、湿度によって伸び縮みする組織でできているからだ。外皮の内には内皮があり、その中に古綿状の組織とともに大量の胞子が存在する。書籍によっては、外皮の開閉によって内皮を締め付けて、胞子が押し出されると説明されている。しかし、私はそれを甚だ疑問に思っている。しかし生物の形態には、必ず理由が存在する。牧野の説明にある「乾燥すると球状になり、地上を転げて胞子を飛散させる」という記述が、事実をうまく説明していると感じた。



上が「広島県のキノコ」、下が「山梨県のキノコ」に載っているツチグリのページである。片方は「ツチグリ科」もう片方は「ホコリタケ科」と、分類が混乱している。キノコの分類では、こうした例は珍しくなく、突然「目」や「網」まで変更になることもある。